

防衛講演会



講師 桜林 美佐 氏

日時 平成24年9月9日（日）

場所 山口市
(山口県総合保険会館)

演題 「日本に自衛隊がいてよかった」 (要旨)

トモダチ作戦の米軍も、大雑把かなという予想に反し、瓦礫の中から人形やぬいぐるみを拾い出して並べてくれるなど思いやりが感じられた。

東北の隊員は、自分の家族も被災し連絡が取れなかった。遺体を収容所に運んだが、その中に自分の家族がいるのではないかと心配した隊員も少なくなかった。また、支援担当の隊員も大変きつい勤務をしているが、派遣された現場の隊員はもっと大変だからと我慢しているところがある。後方部門はともすれば見落とされやすい。後方自衛官が検討され、給料を下げるような動きがあるが、これはほとんどないこと。

国家公務員給与削減が国会を通過したが、その国家公務員の殆どは自衛隊員。隊員は悪いことをしたら減給処分等を受けるが、あんなに頑張っている自衛隊有難うと言われながら、実は全隊員が減給される。こんなおかしいことがあって良いはずがない。

装備品に関して、これは災害派遣にも使えるといえれば認められ、その一方で火砲等の必要性がなおざりにされている節がある。自衛隊にとって最も高度なものは防衛出動で、究極の事態に備えて訓練しているからこそ、それより低い事態には対処が可能になる。本来任務の装備より災害派遣用が重視されてはいけない。

一般競争入札についても価格競争にするとどこかスペックを下げざるを得ない。これは防衛にはそぐわない。国民の9割以上が自衛隊に好感を持っているとの総理府世論調査結果を公表しつつ、同じ時期に給与削減法案を出していた。

自衛隊の家族にとって、一番いて欲しい時に主人がいないことが常識になっており、それでも隊員を支える家族の負担も大きい。給与削減が隊員家族に与える影響は大きい。自衛隊という組織を弱くする要因にもなる。

自衛隊に対するニーズは増える一方である中で、人員の縮小はありえないはず。防衛は中防、大綱の5年、10年で終わる話ではなく、国がある限り必要なもの。

ロシアはフランスのミストラル級強襲揚陸艦4隻を購入し、極東に配備すると聞くが、その理由は日本との領土問題があるからと言っている。脅威はなくなるらない。動的防衛力とか新しい言葉だけではどうにもならない。抑止力と言ひ、非核・専守防衛と言うが、核に対して通常戦力で抑止するには、薄くとも広く備えなければならず、ものすごくお金がかかることを、政府は国民にもっと説明しなければならない。パワーバランスを崩すことは、紛争を誘発することになる。

自衛隊に国家の主権・独立を守ってもらわなければならないが、専守防衛でいけば国民の安全が損なわれる場合がある。本当にそうした状況でよいのか。抑止とは、相手にこちらに手を出したら損をすと思わせる窮極のハラスメント。

日米共同訓練についても、向こう側にとっては、それだけで大きな脅威と感じる。中国は米国の介入度合いを気にしている。オスプレイで日米がうまくいっていないことで抑止力を削いでいる。政治が動かなければよくなるが、安保はなかなか票にならない。

国民一人一人の選択に掛かっている。今我々が日本という国のよき伝統を引き継がなければ、先の戦争で亡くなった人々との約束が守れない。嫌でも面倒でも次の世代に伝えていかなければならない。